

## プロローグ（回想）

「あ……っ♡ハルト様……っ♡」

足首まで下着が落とされ、マリの細い脚から完全に布地が消え去った。冷やかな空気が、熱を持った秘部に触れる。スカートがテントのように膨らみ、その中でハルトが自分の下半身と対峙していることだけが伝わってくる。

「……っ、ん♡ああ……っ♡」

ハルトの熱い吐息が、内腿に直接吹きハルトの舌が、ひだの隙間を割り、奥に潜むクリトリスを執拗に舐めまわした。

「あ、ああっ……♡んんっ、ああああっ……♡」

ハルトの指が、舌と連動するようにマリの膣内へ突き入れた。見えないからこそ、どこを突かれるかわからない恐怖が、快楽を何倍にも膨らませ

る。じゅるり、じゅぷ、と、粘膜が擦れ合う生々しい音がスカートの中で反響し、マリの耳を直接汚していく。

「ハルト、様……っ♡そこ♡すご、すぎて……っ……♡♡」

「……っ♡……ん♡……っ♡」

ハルトは返事をする余裕もないほど、貪欲にマリを味わっていた。彼は舌を平らにしてクリトリス全体を強く押し潰したかと思えば、今度は先端だけを尖らせて、一点を執拗に弾くように舐める。マリの腰が、快樂のあまりガクガクと震え、膝が笑って立っていられなくなる。

「ん♡ん♡うう——っ……♡あ♡♡あ♡あ♡♡♡♡」

ハルトの舌が、今度はマリのなかへと直接割り込んだ。指よりも柔らかく、それでいて圧倒的な熱量を持った舌の動きに、マリの思考は完全に消し飛んだ。

「あ♡♡ハルト様♡♡ハルト様っ♡♡もう、だめ、です……っ♡♡♡」

（ああ、私は……もう、この人のいない世界には戻れない……）

せり上がる絶頂の波。ハルトが舐め上げた瞬間、マリは声にならない悲鳴を上げ、抗いようのない甘い快樂の渦へと深く溺れていった――。

## 序章 静かな朝

目覚まし代わりに習慣は、使用人棟の窓から入る朝の光だった。マリは薄目を開け、天井を見た。石造りの天井は夏でも冷えていて、朝の光が当たる部分だけ少し色が変わって見える。五時四十分。アラームより二十分早い。それでもマリはベッドから出た。二度寝をする習慣が、いつからかなくなっていた。

鏡の前に立つ。肩より少し下まである栗色の髪を、両手でまとめてピンで留める。後頭部でひとつにまとめたアップスタイルが、マリにとっての仕事の顔だった。前髪を整え、白いエプロンを腰の後ろで結ぶ。黒いスカートの前が乱れていないか確かめてから、靴のかかとを揃えて廊下へ出た。

廊下は静かだった。アシユフォード別邸の朝は、いつもこうだ。石造り

の壁、磨かれた大理石の床、天井から下がる古い燭台。大陸の旧貴族建築を忠実に受け継いだこの館は、夏でも廊下の空気がひんやりとされていて、冬は足元から冷えが這い上がってくる。マリはこの家で一年と少し働いているが、まだ迷う廊下がある。広さに慣れるというより、広さの中に自分の動線を刻み込む、という感じが近い。それがまだ完成していない気がして、少し悔しかった。

キッチンで湯を沸かしながら、今日の段取りを組んだ。一階サロンの窓拭き、銀食器の磨き直し、廊下の床のワックス、それから二階のハルト様の部屋。

「マリ、二階は今日も貴女？」

先輩メイドのエレンが、盆を抱えながらキッチンに入ってきた。三十代半ば、細面で切れ長の目をした、物静かな人だ。入って三年、この館の使用人の中ではいちばん長い。感情を表に出さないが、仕事は正確で、マリ

は陰ながら尊敬していた。

「はい、当番ですのぞ」

「そう」

それだけで終わる会話だったが、エレンがわずかに間を置いたのをマリは感じた。何か言いかけて、やめた間。湯気の立つカップを手に取りながら、エレンはキッチンを出ていった。マリはその背中を少し見てから、視線を戻した。聞かなかつた。聞いても、きつと正確な答えは返つてこない気がした。

階段を上り、廊下の突き当たりになると、自然に足が遅くなつた。深呼吸でも、緊張でもない。ただ、ここに来るといつも空気が少し変わる気がする。最初はそれを「古い部屋特有のにおいだろう」と思っていたが、一年経つた今もそう感じるのぞ、においではないのかもしれない。

ノックを三回。返事はない。

「失礼いたします」

カーテンが閉まっていた。広い部屋だった。他の客室と同じ間取りのはずなのに、ハルトの部屋はいつも広く感じる。家具が少ないからかもしれない。装飾的なものはほとんど置かれておらず、大きな書棚と、デスクと、簡素なベッドと、窓際の一脚だけの椅子。それだけで構成された部屋は、余白が多い分だけ、いる人間が目に入ってくる。

ベッドに人影があった。マリは物音を立てないように掃除を始めた。サイドテーブルの空いたグラスを下げ、デスクの上の書類を向きを揃えて重ねる。本棚は昨日と並びが変わっていた。また夜中まで読んでいたのだろう。一冊ずつ、背表紙を合わせて戻していく。

ハルトが読む本は難しいものが多い。政治学、歴史、法律。いくつかは大陸の古い言語で書かれていて、マリには読めない。それでも丁寧に扱う。これがどういうわけか、仕事の中でいちばん好きな時間だった。理由は自

分でもよくわからない。

窓際に移り、カーテンに手をかけた。引いた瞬間、秋の光が斜めに差し込んできた。室内の空気が一変する感じがした。マリは続けて窓の棧を拭こうとして、背伸びをした。端の部分がうまく届かない。角度を変えて、ようやく拭き終えた。

振り返ると、ハルトがこちらを見ていた。ベッドの上で半身を起こした姿勢のまま、視線だけがこちらに向いている。金色の髪が朝の光の中で少し透けて、鋭いつり目が何かを確かめるように止まっていた。背が高いのはベッドに腰かけた状態でもわかる。広い肩、骨格のしっかりした手。マリが知っている同年代の男性とは、どこか印象が違った。

マリが目を合わせると、すっと逸れた。

「……何かございましたか」

「別に」

低く、短い。それ以上でも以下でもない。ハルトはいつもそういう話し方をする。マリは小さく頭を下げ、道具を持って部屋を出た。廊下に出たとき、指先が少し冷たかった。寒いわけではなかった。なのに、どうして冷えているのかがわからなかった。マリはそのまま階段を下り、次の仕事へと向かった。

## 第一章 一人きりの部屋

その命令が下ったのは、翌週の朝礼のことだった。

「二階の掃除当番を変える。マリ以外は外せ」

ハルトは朝食を終えた食卓で、新聞から目を上げずに言った。それだけだった。説明も理由もない。ただ、事実として告げた。食堂に集まっていたメイドたちの間に、薄い沈黙が流れた。マリはトレーを持ったまま、動かなかった。聞き間違いかと思ったが、そうではなかった。エレンが「承知いたしました」と静かに答えた。他の誰も何も言わなかった。ハルトは新聞に目を戻した。

廊下に出てから、後輩のティナがそっとマリの袖を引いた。十七歳、入って半年の小柄な娘で、まだ緊張が抜けきらないまま働いている。黒髪のおかっぱと丸い目が特徴で、いつもマリの後ろをついて歩く。

「マリさん、何かしたんですか。ご主人様に」

「していません」

「でも名指しで……。もしかして怒らせましたか」

「命令ですから。当番が変わっただけです」

ティナはまだ何か言いたそうだったが、マリが先を行っただけで黙った。

それ以上考えないようにした。仕事は仕事だ。理由を探すよりも、丁寧にこなすことのほうが大事だ。マリはそう決めた。

最初の一週間は、本当にただの仕事だった。ハルトは部屋にいることもあれば、いないこともあった。いるときは本を読んでいるか、書類を見ているか、窓の外を眺めているかのどれかだった。マリが掃除をしていても、声をかけてくることはほとんどない。たまに「そこ、もう終わったか」

「それは棚の右に戻せ」と仕事上の言葉が飛んでくるだけで、それ以外は静かだった。その静かさが、マリには心地よかった。必要なことだけ言う。

感情で命令しない。理不尽に怒鳴らない。それだけで、マリにとって十分だった。孤児院を出て最初に働いた家では、そうでないこともあったから。

変わったのは、十日ほど経ったころだった。マリが窓際のサイドテーブルを拭いていると、後ろから気配が近づいた。振り返るより先に、ハルトが隣に立っていた。テーブルの上に置いてあった本を取るためで、マリに目を向けることもなく手を伸ばした。ただそれだけのことだった。でも、距離が近かった。腕がすれ違うくらいの距離。マリは反射的に体を引いた。ハルトは特に気にした様子もなく、本を持って椅子に戻っていった。

その夜、ベッドに入ってから、マリはその距離のことを考えた。なぜ考えているのかわからなかった。なぜ覚えているのかも。意味のあることではない。それはわかっている。なのに、消えなかった。

それからも続いた。背後から腕が伸びてくる。棚の同じ段に同時に手を

かける。廊下ですれ違うとき、壁との間隔が、他のメイドとすれ違うときより狭い気がする。どれも、言えば言えるくらいの理由がある。偶然だ、あるいは単純に、この人は他人との距離感が独特なのだ。そう思おうとした。でも、目が合う回数が増えていた。

気づいたのはある昼過ぎのことだった。マリが書棚の整理をしていて、ふと視線を感じて顔を上げると、ハルトがこちらを見ていた。目が合った瞬間、ハルトは何事もなかったように視線を落とした。マリも何事もなかったように棚に向き直った。でも、心臓が一拍だけ、大きく動いた。

その後も同じことが何度かあった。振り返ると見られている。廊下を歩いていると、扉の陰から視線を感じることがある。気のせいかもしれない。この館は古く、光の差し方が独特だから、影が人に見えることもある。そういう言い聞かせた。

ある夕方、窓の外が赤く染まる時間に、ハルトが読んでいた本を静かに

閉じた。

「マリ」

「はい」

間があった。

「……何でもない」

本を開き直した。マリはその「何でもない」の前に何があったのかを、仕事が終わってからもしばらく考えた。答えは来なかった。来ないまま、廊下を歩いた。使用人棟への階段を下りながら、マリは自分の胸にそっと手を当てた。速い。どうして速いのか、まだわからないままだった。

## 第二章 雨の日のこと

その日は朝から雨だった。石畳に雨粒が当たると音が、館の中まで聞こえてくる。こういう日は窓の結露がひどく、マリは朝から拭いて回っていた。一階のサロン、廊下、応接間。腕を動かすたびに窓ガラスが曇り、また拭く。終わりのない仕事のような気分になりながら、マリは二階への階段を上った。

ハルトの部屋の前に来たとき、手元の布巾が残り一枚だと気づいた。昨日の夕方から体が重かった。気圧のせいかもしれない、とマリは思っていた。雨の日は頭が痛くなることがある。慣れたことだったし、仕事に支障が出るほどでもなかった。ノックして、入った。ハルトはデスクに向かっていた。書類を広げて、ペンを持っている。こちらを見なかった。マリは仕事を始めた。窓の結露を拭き、棚を整え、床を拭く。途中で少しだけ、

視界が揺れた。立ちくらみ、というほどではない。ただ、一瞬、頭の中が遠くなる感じがした。マリは手を棚について、黙って待った。すぐ戻る。いつもそうだ。

「おい」

「はい」

「顔色が悪い」

「失礼しました、問題ありません」

「そうは見えない」

「少し、気圧のせいかと」

ハルトは何も言わなかった。視線だけがこちらに向いたままで、マリは少し居心地が悪くなった。心配されているのか、邪魔だと思われているのか、判断がつかなかった。「続けます」と言っただけで棚に向き直ろうとしたとき、椅子を引く音がした。

「座れ」

「え」

「窓際の椅子。少し座れ」

命令口調だった。でも怒っているわけではない。ハルトはデスクの引き出しを開けて、何かを出した。小さな包みだった。テーブルに置いた。

「甘いものを食べ。気圧で頭が痛いなら糖分が要る」

マリは包みを見た。ハーブキャンディだった。館の台所に置いてあるものとは違う、少し高そうな包装だった。

「……ご主人様のものでは」

「いい。座れと言った」

有無を言わさない言い方だった。マリは窓際の椅子に、少しだけ腰を下ろした。キャンディを一粒、口に入れた。ハツカと蜂蜜の味がした。ハルトはデスクに戻り、書類に向かった。沈黙が続いた。雨の音がした。五分

ほどして、マリは「ありがとうございます、もう大丈夫です」と言って立ち上がった。ハルトは「そうか」とだけ言って、書類から目を上げなかった。仕事を再開した。何事もなかった。ハルトはその後もデスクに向かっ  
ていて、マリに声をかけることもなかった。仕事が終わって「失礼します」と言うと「ああ」と短く返ってきた。

廊下に出て、階段を下りながら、マリはキャンディの味をまだ感じていた。おかしいことは何もなかった。ただ、体調が悪そうに見えたから座らせた、それだけのことだ。あの人はそういう人なのだ。無駄がない。必要なことをするだけだ。そう思った。そう思ったのに、なぜかその夜もそのことを考えていた。

二日後、マリは書庫で仕事をしていた。アシユフォード別邸の書庫は、一階の奥にある部屋で、天井まで届く棚が四列並んでいる。踏み台を使わないと届かない棚が上の方に三段あって、マリは踏み台を引きずりながら

棚の埃を払っていた。上から三段目を拭いていたとき、足が滑った。踏み台がわずかに動いた。体勢が崩れた。落ちる、と思った瞬間、腕を掴まれた。

「っ…」

引き上げられた、というより、支えられた。体重を受け止めた腕が、マリの腕と背中に回っていた。ハルトだった。

「……なんで、」

「通りかかった」

短い答えだった。マリは踏み台の上に戻り、支えていた手が離れた。離れるとき、背中に触れていた感触が消えた。

「怪我は」

「ありません、ありがとうございます」

ハルトは踏み台を軽く蹴って、動かないか確かめた。それから、何も言

わずに書庫を出ていった。マリは棚の前で、しばらく動けなかった。支えられた腕の感触が、まだあった。あの広い手のひらが背中に触れた一瞬が、消えなかった。頭の中で繰り返した。繰り返してから、自分がそうしていることに気づいて、棚に向き直った。何でもない。転びそうになったから支えた。それだけだ。埃払いを再開した。手が少し、震えていた。寒いわけではなかった。

それからしばらくして、廊下でハルトとすれ違ったとき、マリは妙なことに気づいた。ハルトは長身だ。他の使用人と並ぶと頭ひとつ分は違う。廊下ですれ違うたびに、マリは自然に少し見上げる形になる。その日もそうだった。ただ、いつもと違ったのは、廊下の窓から差し込む光がちょうど横から当たっていたことだった。金色の髪が、光の中で白に近く透けていた。マリは目が止まった。ハルトはマリには目を向けなかった。すれ違いざまに「廊下、今日中に終わらせろ」と言って、そのまま行ってしまっ

た。マリは廊下の真ん中で、少しのあいだ立っていた。べつに、何も起きていない。命令を受けて、すれ違った。それだけだ。それだけなのに、視線がどこにも定まらなかった。窓の外を見て、床を見て、廊下の先を見た。胸が、変な動き方をしていた。どくどくと、速い。

速いのに、嫌ではなかった。

嫌ではないことに、マリは気づいていなかった。ただ、廊下の窓を拭きながら、さっきの光の中の横顔を、もう一度だけ思い出した。それだけだった、とマリは思った。それだけだった。

## 第二章 浴室の事故

ノックをしなかったのは、マリのミスだった。言い訳をするなら、両手が塞がっていた。シャンプーとコンディショナーの新しい瓶を両腕に抱えていたから、ドアを叩く手がなかった。それに、この時間にハルトが浴室にいるとは思っていなかった。夕食前の一時間、ハルトはいつも書斎にいる。エレンもそう言っていた。だからマリは詰め替えのタイミングをこの時間に選んだのだ。全部、マリのミスだった。

ドアを肩で押し開けて、一步踏み込んだ瞬間、湯気が顔に当たった。あ、と思った時にはもう遅かった。濡れた石の床に、靴底が滑った。

「きゃっ」

声が出た。体が前に傾いだ。両腕に抱えていた瓶が二本とも床に転がり、派手な音を立てた。体勢を立て直そうとしたが、片足が完全に滑っていて、

どうにもならなかった。倒れる、と思った瞬間、腕を掴まれた。そのまま引き寄せられた。

「っ……っ」

気づいたとき、マリはハルトの腕の中にいた。湯気の中だった。タイルの壁が目の前にあって、その向こうに、ハルトの顔があった。濡れた金髪が額に貼りついていていた。鋭いつり目が、驚いたように開いていた。二人とも、しばらく動かなかった。

マリが最初に気づいたのは、ハルトが何も着ていないということだった。次に気づいたのは、自分も薄着だということだった。今日は洗濯の後で、自室に戻る前に詰め替えだけ済ませるつもりだった。だから作業着の上着は脱いでいた。白いシャツ一枚の下に、薄い下着だけだった。湯気で、シャツが肌に貼りついていていた。転んだ拍子に、ハルトの手がマリの胸のあたりを掴んでいた。支えようとして、そこに手が当たったのだろう。それ

はわかった。わかったのに、ハルトの手は離れなかった。

一秒。二秒。

「……っ♡」

マリの顔が、一気に熱くなった。耳の先まで赤くなるのがわかった。ハルトの手が、ゆっくりと離れた。

「……入ってくることは言え」

低い声だった。声に動揺はなかった。でも、耳が少し赤かった。

「も、申し訳ありません、存じ上げずに、シャンプーが、切れていたとエレンさんから」

言葉がまとまらなかった。マリは床に転がった瓶を拾おうとして、また滑りかけた。ハルトがため息をついて、腕を掴んだ。

「落ち着け」

「は、はい」

「怪我は」

「ありません」

「そうか」

ハルトはマリの腕を放し、自分はバスタオルを取った。マリは瓶を両方拾って、胸に抱えた。どこを見ればいいのかわからなかった。天井を見た。

「あの、失礼しました、すぐ出ます」

「待て」

「え」

「さっきの」

ハルトが言った。マリは固まった。

「嫌だったか」

真顔だった。いつもの、感情が読めない顔だった。でも目が、微妙に逸れていた。マリは答えようとした。嫌でした、と言えよよかった。それが

正解だった。メイドとしての正解だったし、この場を切り抜ける正解でもあった。でも。

「……嫌では、なかったです……♡」

言うてから、自分でも驚いた。ハルトも、一瞬だけ目を見開いた。

「っ、申し訳ありません、今のは忘れてください、失礼しました、失礼します」

まくしたてて、浴室を出た。廊下を早足で歩いた。瓶を抱えたまま、使用人棟の階段を下りた。自室のドアを閉めて、ベッドに座った。顔が、まだ熱かった。手で押さえた。冷たくならなかつた。

「嫌では、なかった」

口の中で繰り返した。本当のことだった。それが一番、どうしていいかわからなかつた。

## 第四章　こぼれた本音

浴室の件から、マリのミスが増えた。自分でも気づいていた。気づいていたのに、止められなかった。翌朝、朝食のトレーを運ぶとき、パンを一枚床に落とした。拾って戻したが、ハルトが見ていた。何も言われなかったが、それが余計に恥ずかしかった。昼前、書棚の整理をしているとき、本を二冊まとめて落とした。大きな音がして、ハルトが顔を上げた。

「すみません」と言って拾ったが、手が震えていた。夕方、廊下でエレンとすれ違いざまに「最近どうしたの、上の空ね」と言われた。「何でもありません」と答えた。

答えながら、嘘だと思った。

ハルトの部屋に入るたびに、浴室のことを思い出した。湯気。濡れた金髪。あの手の感触。そして「嫌では、なかったです」と言ってしまった白

分の声。考えないようにするほど、考えた。仕事に集中しようとするほど、ハルトの動作が目に入った。書類をめくる手、窓の外を見るときの横顔、低い声で短く言葉を出す口元。今まで見ていなかったわけではない。でも今は、見るたびに何か胸の中で動いた。これは良くない、とマリは毎晩思った。良くないとわかっているのに、翌朝また部屋に向かった。仕事だから、当然だ。でも廊下を歩く足が、以前より少しだけ速かった。

ミスが重なって五日目の午後だった。ハルトが珍しく部屋にいない時間に、マリは掃除に入った。いない方が集中できると思っていた。実際、最初の三十分はうまくいっていた。棚を拭き、書類を整える。

サイドテーブルのジュースのグラスを動かそうとしたのは、テーブルを拭くためだった。指先がグラスの縁に当たった。あ、と思った瞬間、グラスが傾いた。受け止めようとして、逆に押した。中身がこぼれた。後退りしようとして、足が滑った。そのままその場に尻餅をついた。冷たかった。

じわりと濡れた感触がスカートの下から広がった。

「……っ」

最悪だった。

スカートの前側は飛んだ液体で濡れていた。後ろ側は床のジュースをものろに吸っていた。一番ひどいのは下着だった。完全に濡れていた。このまま仕事を続けることはできない。誰もいない。マリは立ち上がって、下着を脱いだ。洗面所で手早く濯いでタオルに挟んだ。スカートはエプロンで隠れる。着替えを取りに戻るより、残りの仕事を終わらせてからの方が早い。そう判断した。

床を拭いていると、扉が開く音がした。

「床まで拭いているのか」

ハルトだった。

「こぼしてしまいました、すみません」

「手伝う」

「結構です、もうすぐ終わります」

「広い」

それだけ言って膝をついた。マリの隣から床を拭き始めた。距離が近かった。後退りながら拭いていたとき、ハルトも同じ方向に動いた。ぶつかった。

マリの背中にハルトの体が覆いかぶさる形になった。その瞬間、ハルトの体がマリのお尻に触れた。自分でも想定していなかった声が出た。

「きやっ…あっ…♡」

「…っ!!」

一瞬の沈黙だった。ハルトが、固まった。わかってしまった、とマリは思った。

「えっと…あの…」

この体勢で、この距離で。顔が燃えた。ハルトはゆっくりと体を起こした。立ち上がって、洗面所の方へ歩いた。戻ってきたとき、手に清潔なタオルを持っていた。

「貸せ」

「自分で」

「いいから」

膝について、スカートの濡れた部分にタオルをそっと当てた。押さえるようにして、丁寧に。乱暴ではなかった。急いでもいなかった。それだけなのに、マリは息の仕方を忘れそうだった。

「……なぜ最近ミスが多い」

「気をつけます」

「そういうことを聞いていない」

「原因がある顔をしている」

「……あります」

「言え」

「言えませんが」

「なぜ」

「言ったら、もっと集中できなくなるので」

沈黙が落ちた。タオルを動かす手が止まった。

「集中できないのは、この前からか」

「……この前というのは」

「浴室のことだ」

マリの顔が、一気に熱くなった。

「……そう、です。浴室のことを、考えてしまって、それで、仕事中に」

「それで、ミスが増えた」

「……はい」

言い終わってから、消えてしまいたかった。

「なぜ、そんなに優しくしてくださるんですか」

言ってから、おかしい質問だと思った。でも止まらなかった。

「さっきのタオルも、書庫で支えてくださったことも、雨の日のキャン  
デイも。ご主人様なのに、どうして」

ハルトの手が止まった。しばらく、何も言わなかった。

「……言葉にできないことがある」

低く、短く言った。それだけだった。その言葉の意味を考えようとした  
とき、ハルトが立ち上がった。

「ベタベタするだろ、今の状態じゃ」

「はい」

「内緒でうちの風呂を使え。今は誰も使っていない」

「そんな、滅相ありません」

「命令だ」

有無を言わさない声だった。

ハルトの浴室は、使用人棟のものとは比べものにならない。広い。タイル張りの床、深い浴槽、窓から見える夕暮れの庭。マリは入口に立っ  
たまま、しばらく動けなかった。

「さっさと入れ。俺はここで待っている」

ハルトが廊下側からドアを閉めた。マリは一人になった。言われた通りにするしかなかった。服を脱いで、濡れたスカートとエプロンをきれいに  
畳んで端に置いた。湯に浸かると、冷えていた体が一気に温まった。目を  
閉じた。さっきの会話が頭の中で繰り返した。言葉にできないことがある。  
それはどういう意味だったのか。

考えていると、廊下から足音が聞こえた。複数の足音だった。止まった。  
ドアの外で、声があった。テイナの声だった。

「あれ、ここ使用中ですか？ 鍵がかかってて」

マリは湯の中で固まった。

「俺が使っている」

「あ、失礼しました！ でも中から声がしたような」

「独り言だ。何か用か」

「い、いえ！ 失礼しました！」

足音が遠ざかった。マリは息を吐いた。しばらくして、ドアがわずかに開いた。

「行ったか確認した。……まだいるか」

「います」

「そうか」

閉まるかと思った。閉まらなかった。

「……もう少しで出ます」

「急がなくていい」

少しの沈黙があった。ドアが、少し開いたままだった。完全に閉まっていなかった。マリはそれに気づいていたが、言えなかった。

「さっきの話だが」

「はい」

「言葉にできないとは言ったが」

「……はい」

「俺は、嘘はつかない」

マリは湯の中で、膝を抱えた。

「わかって、います」

「それだけだ」

それだけ、の意味を考えていたとき、足音がまた聞こえた。今度は複数、しかも近かった。

「っ、誰か来ます」

ドアが開いた。ハルトが入ってきた。服を着たまま、すぐに後ろ手でドアを閉めた。足音が近づいてきた。ドアの前で止まった。エレンの声があった。

「若主人様、こちらにいらっしゃいますか、夕食の件で」

マリは浴槽の中で動けなかった。ハルトは後ろ手でドアを押さえたまま、壁際に立っていた。

「後にしろ」

「はい、失礼しました」

足音が遠ざかった。二人とも、しばらく動かなかった。ハルトが壁から離れた。服を着たまま浴室に入ったせいで、飛んだ湯が袖にかかっていた。袖口が濡れていた。マリは浴槽の中から、ハルトを見上げた。

「……服が、濡れてしまいました」

「構わない」

ハルトがしゃがんだ。浴槽の縁に腕をのせて、マリと視線が近くなった。濡れた袖口が、縁に触れた。マリは動けなかった。鋭いつり目が、すぐそこにあった。金色の髪が、浴室の湿気で額に貼りついていて。服を着たまま、この距離にいる。それがどういふことなのか、マリにはわかっていて。

「出るか」

「……出た方が、いいですよね」

「そうだな」

でも、どちらにも動かなかった。ハルトの手が、浴槽の縁に置かれたまま、マリのすぐそばにあった。マリはその手を見た。大きくて、骨張っていて、袖口から濡れていた。

「……ご主人様」

「何だ」

「服、本当に濡れてしまった」

「構わないと言った」

「でも、このままでは」

「マリ」

名前を呼ばれた。いつもの声だったのに、この距離で聞くと違った。

「は、い」

「さっき言ったことを、もう一度言う」

マリは息を止めた。

「俺は嘘はつかない」

浴室に、静寂が落ちた。

— ハルト視点 —

指に、髪の毛の感触が残っていた。濡れた栗色の髪が、指の間をさらりと流れたあの感触。それだけのことだった。ただ触れただけで、それ以上のことはしていない。していないのに、手を引いた後もずっと残っていた。

限界だ、と思った。

正確には、とつくに限界だった。ただ、今日それが改めてはつきりした。マリがこの家に来たのは一年と少し前のことだ。孤児院の支援をしている施設からの紹介で、他にも何人か候補がいた。ハルトは選考に関わっていない。関わるつもりもなかった。でも、初日に廊下ですれ違ったとき、足が止まった。栗色の髪、真っ直ぐな背筋、仕事道具を抱えた細い腕。顔を見た瞬間、息が止まった。

あの子だ、と思った。

六年前、ハルトが十五歳だったころのことだ。アシュフォード家の政治

的な立場を理由に、同じ貴族の子どもたちから孤立させられていた時期があった。言葉で追い詰められる日が続いて、ある日、人気のない場所に追込まれた。逃げ場がなかった。どうするべきかわからなかった。そこに、通りかかった子がいた。小さな女の子だった。孤児院の施設見学か何かで来ていたらしく、引率の大人とはぐれていた。状況を見て、何が起きているかわかったのだらう。怖かったはずだ。それでも、ハルトの隣に来て立った。何も言わなかった。ただ、隣に立った。それだけで、周りの空気が変わった。大人数で子どもひとりを追いかけていた連中は、何となく気まづくなって散っていった。

ハルトはその子に名前を聞けなかった。礼も言えなかった。気づいたら大人に連れて行かれていた。でも、顔は覚えていた。ずっと覚えていた。だから、廊下ですれ違った瞬間にわかった。栗色の髪、その目、その輪郭。六年経っていたが、迷わなかった。

あの子が来た、と思った。

それからどうするべきかを、ハルトはずっと考えていた。礼を言うべきだった。覚えていると伝えるべきだった。でもマリは覚えていなかった。

それは最初の頃の会話の中でわかった。幼少期の記憶がほとんどないらしく、孤児院での出来事も断片的にしか残っていないと、エレンを通じて聞いた。だから言えなかった。覚えていない相手に「あの日のことを覚えている」と言う。それがどういう意味を持つか、考えれば考えるほど言い出せなかった。恩着せがましい、重い、そう思われなくなかった。ただ近くにいたかった。それだけだった。

なのに。気づいたら好きになっていた。いつからかはわからない。仕事中のマリの横顔を見ていた時かもしれない。本棚を丁寧に整える指先を見ている時かもしれない。あの雨の日に顔色が悪いのを隠そうとして、でも隠せていなかったあの顔を見た時かもしれない。

気づいた時には、もう取り返しがつかなかった。

ちゃんと話すべきだとわかっていた。言葉で伝えるべきだと。でも言葉が先に出てくるのが、ハルトには昔からなかった。感情より先に体が動く。それを知っていたから、ずっとこらえていた。浴室の件は、事故だった。本当に事故だった。でも、あの「嫌では、なかったです」という声を聞いた瞬間から、こらえる理由が半分になった。今日、床と一緒に拭いた。体が触れた。それでも動かなかった。動かずに、タオルで丁寧に拭いた。それだけで精一杯だった。なのに。浴室の中で、濡れた髪に触れた。さらりと流れた、あの感触。湯気の中でこちらを見上げたあの目。ご主人様の浴室に入っているのに、怖がるでも媚びるでもなく、ただ真っ直ぐこちらを見ていた。わかって、います。そう言った声が、まだ耳に残っている。言葉にできないことがある、と言った。それは本当のことだった。好きだ、という三文字が、どうしても先に出てこない。出てくる前に手が動く。

それが自分だと知っている。でも。もう少しだけ、こらえようと思っていた。もう少しだけ、ちゃんと言葉を探そうと思っていた。なのに、あの髪  
の感触が消えない。

無理だ。もう止まれない。

ハルトの手が、髪に触れていた。さつきから動いていなかった。触れたまま、止まっていた。マリは息ができなかった。一回目の浴室とは、違っていた。あの時は事故だった。今回も最初は事故に近かった。でも今は違う。ハルトが自分で入ってきて、縁に腕をのせて、髪に触れている。それが何を意味するのか、考えなくてもわかった。

「……ご主人様」

ハルトの手が、髪から頬へと移った。濡れた手のひらが、頬に触れた。大きくて、温かかった。

「っ……♡」

唇が触れた。最初は柔らかかった。様子確かめるような、短い触れ方だった。離れかけて、また重なった。今度は違った。深かった。

「んん……♡」

マリの頭が、真っ白になった。ハルトの手が後頭部に回って、角度が変

わった。息ができなくなるかと思った。できなくていいと思った。

「んあ♡…はあっ…♡」

唇が離れた瞬間、足元がなくなる感じがした。浴槽の縁に手をついた。ハルトの胸に額がついた。心臓の音が聞こえた。自分のものか、ハルトのものか、わからなかった。

「ふっ…♡んん♡」

もう一度、唇が重なった。マリの手が、反射的にハルトの袖を掴んだ。掴んでから、気づいた。離せなかった。自分は何も着ていない裸の状態だとその時に気づいた。顔が真っ赤になった。

ハルトの指が、マリの顎を優しく上向かせた。浴室の湿った熱気が、二人の間に立ち込める。

「…逃げるな」

「っ、逃げて、ません…♡」

熱い吐息が唇を掠める。ハルトの濡れたシャツがマリの胸元に張り付き、その向こうにある彼の硬い体温が、剥き出しの肌に直接伝わってきた。

ハルトの大きな手が、マリの細い肩から背中へと滑り降りる。濡れた肌の上を、指先が丁寧に、執拗に辿っていく。触れられた場所から火がつくようだった。

「……熱いか」

「はい、すごく……♡」

「俺もだ……♡」

重なった唇が、今度は貪るように深くなった。マリの口内をハルトの舌が支配し、逃げ場を奪う。銀色の糸が引き絞られ、マリの喉から掠れた溜息が漏れた。

ハルトの手が、浴槽の湯の中に沈んだ。水中で、彼の指先がマリの太腿をゆっくりと割り、内側の柔らかかな部分へと這い上がる。